D—14 女働らき家庭の住空間（第一報）女働らき家庭の住み方の特徴

三重大教育 中島喜代子

目的 女働らき家庭の住空間のあり方を考察するため、専業主婦の家庭と比較することにより、女働らき家庭の住み方の特徴を分析しようとする。まず、主婦の職業の有無と、形態により、専業，内職，パート，常雇いの家庭に分け、住み方の分析を行い、次に、住み方は、家族周期等の人的条件により、非常に大きな影響を受けることから、家族周期別に、専業とパート，内職、常雇いとの比較を行う。

方法 三重県四日市市の笹川団地内にある２ＤＫ，３Ｋ，３ＤＫの住宅を対象に、アンケート調査を行った。調査時期は、昭和53年8月である。サンプルは、2DKが84件、3Kが117件、3DKが99件の計300件である。

結果 ①専業家庭は、夫、妻の年令が低く、家族周期は、末子6才未満が多くなっている。②専業家庭は第2公私室を多く持ち、女働らき家庭の方は、夫婦室の独立の方に向いている。③家族の人的条件の違いに起因する寝室数や、空間の余裕の有無に差がみられる。④台所の型態は、専業で独立キッチンが多く、常雇いでは、独立キッチンと、LDKやF.R型台所が多い。同様に、台所とその隣りの部屋との開閉の度合（ワンルーム化度）は、常雇いで、完全開放と、完全閉鎖に二分される。⑤家族周期別に台所の型態とワンルーム化、食卓の置かれる部屋についてみると、ワンルーム化では、家事量の少い家族周期段階では、専業の方がワンルーム化が進み、逆に、子供が末子3才未満では、女働きの方が、ワンルーム化が進んでいる。台所の型態や、食卓の置かれる部屋についても、ワンルーム化の場合と同様の傾向が見られる。